

変化しつつある中国現代家族の世代間関係 ——北京の一人っ子世代を中心に——

蘇 思栄

キーワード：一人っ子、世代間関係、中国、家族、インタビュー調査

要旨

急激な少子高齢化に直面する中国社会における世代間関係はどう変容しているか。本研究は、北京に定住し、20代～30代で子どもを持つ既婚者である一人っ子世代の女性10名を対象としてインタビュー調査を実施し、親世代と一人っ子世代、さらに一人っ子世代からその子世代における経済的、日常的、精神的サポートの実態、および彼らの意識を探り、各世代間の意識の違いを比較した。その結果、現在の中国において、世代間関係は伝統的な「家族主義」が崩れ、個人主義が進みつつあり、また父系規範が弱まって双系化が進んでいることがわかった。さらにその傾向は、一人っ子の親世代から一人っ子世代よりも、一人っ子世代からその子世代に向けてより強くなっていることも明らかになった。本調査の一人っ子世代の期待する独立した世代間関係には、家族以外のケアを充実させていかななくてはならないという緊急の課題が示唆される。

はじめに

中国では一人っ子政策が国策として実施された結果、1980年代から2010年までに1.64億人の一人っ子世代がいるとされる(辜2016:88)。現在、初代の一人っ子世代(80年代、90年代出生)は結婚、出産、育児の適齢期であり、彼らの親は定年を迎えている。一人っ子同士が結婚する場合、「1人の子ども、2人の両親、それぞれの祖父母4人」という「4・2・1」家族構造となり、家族ネットワークが縮小する。このような状況の中で、夫婦2人が両方の両親4人を扶養することは非常に大きな負担となっており、親子関係は以前の世代より複雑である。本稿は、まずマクロの視点で世代間関係に関する社会的背景を、また、ミクロの視点で親世代と子世代の関係性の変化と特徴を整理する。さらに、現在の都市家族において、キョウダイ¹のいない一人っ子たちに焦点をあて、彼らの親世代との支援関係に着目し、その実態と意識を深く探るため、インタビュー調査を行う。対象者の「生の声」

¹ ここで「キョウダイ」は兄弟姉妹を示す。一人っ子政策は流動的で、多面的な政策であり、決して一元的な政策ではない(詳細は若林2006:69)ことから一人っ子世代であってもキョウダイがいる場合もある。本研究の対象者は「一人っ子政策」の下で生まれたキョウダイのいない一人っ子世代である。

から経済的サポート（住宅費用、生活費、仕送り、プレゼント等の金銭的援助）、日常的サポート（お金に関するものを除く、生活上の手助けや世話。例えば、日常の買い物、食事、洗濯、掃除・片付け、病気ときの世話、子育て等）、精神的サポート（悩み事の相談や、帰省をしたり、電話で話すことで安心感を与える等）の実態を明らかにする。さらに、親になった一人っ子世代が彼らの子世代に抱く期待がどのようなものであるかを探り、今後の中国の世代間関係の行末について議論を試みる。

1. マクロの視点でみる世代間関係に関する背景

少子高齢・人口減少社会に突入したことにより、中国は高齢者人口の扶養負担、医療、介護等の社会問題に直面している。これらの問題に対応するための社会保障制度、養老システムを構築することは重要な課題である。

現在の社会保障制度の中で、特に高齢者に関わるのは主に中国の社会年金制度と医療保険制度である。しかし、年金の加入率はまだ低く、2010年時点で、都市部では84.7%に達しているが、農村部では34.6%にとどまっている。また、存在しているいくつかの年金制度間の給付水準の差が極めて大きい。都市部の平均受給額が1,527元/月に対し、農村部では、わずか74元/月である。さらに、各年金制度の管理運営が各地の地方政府に委ねられているため、都市間における年金基金の移動はできないという問題が生じている（関2012）。一方で、中国では都市部及び農村部において医療制度改革が行われているが、医療費の抑制システムも完全には機能していない。また、医療保険の加入率が低いため、医療を受ける権利が不平等で、高齢者が病気になると経済的に困窮することがしばしばある（劉曉梅2005）。今後さらに増え続けていく膨大な数の要介護高齢者の扶養を子ども世代に頼らざるを得ない状況になり、子ども世代への負担が重くなることが容易に予測される。

老親扶養の政策については「居宅養老を基盤として、社区²養老を利用しながら、施設養老を補充する」ことが養老システムとして提唱されている。居宅養老は、高齢者が居住している各社区において民間、事業団体、NPOなど多様な介護サービスの供給を利用して自宅で養老することである（陳2015）。しかし、社区の運営資金、専門的サービスの不足や、社区サービスがまだ高齢者に広く知られていない等の問題がある（金2017; 梁2018）ため、高齢者が自宅でサービスを提供されることを実現するのは現在の中国では難しいと考える。また、高齢者に対する施設については、ベッド数が不足している問題がある。中国の高齢者福祉施設のベッド数は高齢者総数の1%前後になり、一番高くても2008年と2009年の1.5%にしか達しておらず、先進国の5~7%に対してまだ低い。さらに、高齢化に対応するために、急速に福祉施設を整備しているが、高齢者の施設への入居意識が低く（入所施設への抵抗感）負担能力も低いため、空きベッド状況が続いている（郭2014）。

² 「社区」とは英語“community”（コミュニティ）の中国語訳で、一定の地域範囲内に集まって住んでいる人々から構成される社会生活共同体を指す（詳細は畢2010: 139）。社区では、医療、介護、デイケアなどを含む様々な高齢者向けサービスが提供されている（陳2015: 155）。

このような高齢者に関する年金制度、医療制度の不足などを含む社会保障問題、また、地域の養老サービスと施設の低利用率という現状などにより、家族が高齢者の扶養責任を担わざるを得ない現実がある。

さらに、家族が老親扶養を行う主体となることは法律によって強固になっている。『第四部中華人民共和国憲法』では「親は未成年の子を扶養する義務がある。成人した子が親を援助し、扶養する義務がある」と規定している。また、『中華人民共和国老人權益保障法』では、「老人扶養は主に家族に頼り、家族が老人に関心を寄せ、家族が老人の世話をしなければならない」（第10条）と記述している（梶田 2012）。そのため、経済の高度成長、社会の急速な変動、核家族時代の到来によって家族扶養機能が弱まっていく現在の中国において、子世代が親世代の扶養に関してどのような役割を果たしているかを把握するため、子世代と彼らの親世代の関係性を解明することは重要な課題と考える。

2. ミクロの視点から見る親世代と子世代の関係性

一般的に、親子関係は前期、中期、後期の3期に分けられる。即ち、「未成人子と親」の関係、「成人子と壮年期の親」の関係、そして「成人子と高齢期の親」の関係である（大和 2015）。中～後期において、成人子の結婚と同居関係の有無は、親子関係が変化するターニングポイントとなるため（風 2013）、本稿では、中～後期、すなわち、親世代と成人子の関係に注目する。中国において、法律上でも、倫理上でも、親を扶養することは子世代の当然の責任として要求されている。これは中国文化の一つの特徴で個人よりも家族を中心とする家族主義とされる（康 2012）。また、中国系社会は基本的に父系制であり、長い歴史を通して、息子が責任をもって老親を扶養するという伝統文化がある。しかし、80年代以降、都市化が急速に進み、さらに、一人っ子政策の実施により、子ども数が減少するとともに、親子関係が変化せざるを得ない状況になった。この世代間関係の変化に関して様々な研究が蓄積されている。

王（2004）は、中国の社会変革という視点から、現代の中国家族は社会の一つの単位として世代間関係も新たな方向に進んでいると指摘し、その3つの特徴をあげた。第一に、世代間関係は「分而不離」の状態、つまり、両世代は別居しているけれども、近居で実際には離れてないことである。一人っ子政策により、子どもの数が少なくなり、生活習慣が違ふなどの理由で、親世代は子世代と同居する意識が弱くなった。第二に、「隔代扶養」が増加している。出稼ぎや共働き世帯の増加や親世代自身の希望で親世代は孫を世話することが多くなった。第三に、世代間関係の中心は下向き（次の世代）になる。一人っ子政策で、子どもの数が少ないため、子どもの価値と地位が急速に上昇した。親は家内の資源そのものを祖父母世代より子世代を優先していることが、現在の中国における世代間関係の変化であるとしている。

中国都市部における研究（城本 2001）は、子世代と親世代が両世代とも経済的に恵まれ、かつお互いに自立が可能な場合は、扶養や養育という枠組みを越えた交流が生まれる互恵

型となるとしたが、実際には、子世代が経済的な援助を始めとして多様な援助を親から受け、親世代に依存しながら同居していることが明らかにされた。これは、都市では家賃が非常に高いため、住宅を購入せざるを得ないが、その資金もないため結婚後も親の家に同居せざるを得ない状況である（城本 2001）。王（2004）の第一の指摘とは矛盾ではなく、むしろ都市部の特徴ともいえる。都市部の研究として他にも世代間関係はすでに伝統的な家族主義から外れ、親世代と子世代とも家の穏やかさを重視するとともに、子世代が家族より個人を優先する個人主義を萌芽しているという指摘もある（康 2012）。康はこれを「新家族主義」と定義した（康 2012 : 88, 201）。さらに、子世代は個人の独立性を追求しながらも、父系制と孝道責任がまだ強く残っているため、両世代はこの家族規範に従わなければならないという矛盾した心境も指摘されている（石 2015）。

これらの研究が示しているのは、現代における中国世代間関係が個人主義と家族主義の両方の中で揺れているという状況である。同居か近居かという選択肢も居住地域の経済状況によって多様である。しかし、家族内で家族資源が下の子世代に集中するという変化は、多数の研究で指摘されており、現代中国の世代間関係はすでに伝統的な家族主義から外れつつあることを示していると言えるのではないか。この変化の要因について、劉佳（2015）は主に親の意識変化が左右しているという。中国の一人っ子世代の親たちが子ども世代から孫世代に至るサポートをすることは自分に幸福感をもたらす。さらに、一人の子どもしかいないため、子世代による老後保障の期待は低下しつつある。それは、親にとっての子どもの価値が家庭労働力や老後保障などの実用的な価値から、主に感情を託し、誇示的資産としての価値に転換したことを示すという。

2015年に「一人っ子」政策は廃止されたが、出生率は下がり続けており³、「4・2・1」家族が直面する問題は今後も変わらないだろう。子どもの数と親族ネットワークは世代間関係に強く影響を与えるため、世代間関係は以前より厳しい状況になっている。

3. 仮説

現代中国の世代間関係が変化し、伝統的な家族主義から外れつつあることを検証するために、本研究では費（1985）の定義する「フィードバックモデル」と「リレーモデル」の概念を利用し仮説を立てる。中国の伝統的な世代間関係は、「フィードバックモデル」とされる（費 1985 : 307）。すなわち、家族の世代間では、親世代がまず子世代を扶養し、親が高齢になると子世代からサポートを受け入れ、世代間で授受が均衡している。親を扶養することは、子世代の当然の責任として要求されている。これは中国文化の一つの特徴であり、非常に古くからそれを維持する多くの倫理観念が存在する。例えば、中国社会では、「養児防老」は世代間で授受を均衡させる伝統的なパターンである。「リレーモデル」とは、代々順送りに受け継いで次へ送り伝えていくモデルとされる。親を扶養することは子世代

³ 国家統計局の発表によると、中国の2017年の出生者数は2016年と比べて63万人減少し、出生率は2016年と比べて0.52ポイント減少して12.43パーミルとなった。

の必須の義務ではないが、親に対して感情的にはやはり密接な関係を持っている(費 1985)。現代の中国は一人っ子政策の実施、とくにそれによって生じた家族規模と家族構造の変化によって、伝統的な「フィードバックモデル」は未曾有の挑戦に直面している。世代間では授受関係が伝統的な均衡を保つことができるかは疑問である。そのため、現代中国の世代間関係の行末は、伝統的な「フィードバックモデル」から「リレーモデル」になる傾向があるという仮説1を立てる。

劉佳(2015)が実施した一人っ子世代の親の意識に関する調査や梁ら(2005)の行った中国一人っ子世代の大学生の親のアンケート調査によると、本来親の面倒を見るのが理想とされる「孝」の価値観に対する変化が見られつつある。また、収入が高い層の親世代においては、「必ずしも子ども自らが介護をする必要はない」という認識が高くなっており、「子どもが当たり前親を扶養、介護する」という伝統が少しずつ失われていく恐れがあるという(梁ら 2005:242)。これらはリレーモデルを示唆すると思われるが、本研究では、一人っ子世代のその子世代との関係も含めることによって今後の世代間関係のゆくえを明らかにする。

また、中国系社会は基本的に父系制であり、長い歴史を通し、息子が責任をもって老親を扶養するという伝統文化がある。費(1985)によると、伝統的な中国家族親族の特徴として、娘が結婚後夫方と同居のパターンが存在し、息子は結婚後も親と同居または近居して継承、相続をするとともに、高齢になった親の扶養、介護を担うことが期待される。それに対して、娘はいずれ婚出して夫の方に入るため、継承、相続の権利からも実親の扶養、介護の義務からも排除される。また、結婚後夫方同居か夫方近居であるために、親族間の交際、援助も夫方へ偏る傾向があると捉えられてきた。しかし、80年代以降、都市化が急速に進んできたため、家族規模が縮小し、農業社会に適合的であった父系的な家族、親族関係が変化せざるを得ない状況になった。さらに、人口学的に、一人っ子政策の実施により、子どもの数が減少するとともに、息子のいない家庭が増加したため、この伝統文化を支えるための家族構成が大きく変化した。一人っ子世代夫婦は、娘であれ、息子であれ、自分の親を介護しなくてはならない現実と直面し、父系的な世代間関係の維持が困難となる。今後、中国の世代間関係の行末が双系的になるという仮説2を立て、検証する。ここで「双系的」とは、同居や交際・援助について、夫方に偏らず、夫・妻方両方とバランスよく関係性をもつ(落合 2004)ことである。

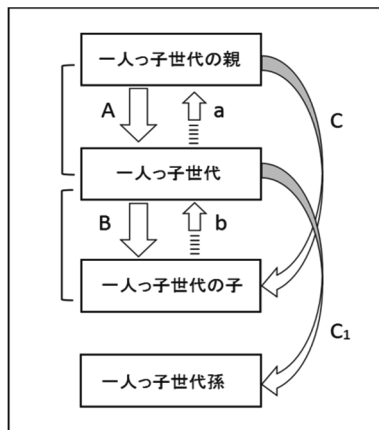
双系化説に関してはこれまでも様々な指摘がある。落合(2008)は江蘇省無錫市の都市家族の事例調査から親との同居は圧倒的に男系に偏っているが、育児の実践場面では女系からの支援が目立つことを指摘し、養老、介護の実践場面で今後は女系化が進行する可能や、親族以外の社会ネットワークの重要性が増えていく可能性を示唆した。田淵(2013:238)は成都で妻方親との同居率に有意な変化は見られないものの、夫方親との同居率が低下している点を指摘した。また、施(2013)の調査結果によると、女性の経済力の上昇により、妻方の援助関係やコミュニケーションの活性化が認められたが、両世代の同居関係や

子世代から親世代への扶養の面における父系親族規範は今なお持続している。これらの指摘は一人っ子政策実施下の調査をベースとしている。本調査では、少子高齢化が進み、家族構造がさらに大きく変化した現在の親子関係を見ることで、双系化の傾向をよりはっきりと探ることができるのではないかと考える。

4. インタビュー調査

調査の目的は、第一に、一人っ子世代と彼らの親世代の授受関係に着目し、その実態を明らかにすることである（図表1のAとa）。第二に、親になった一人っ子世代が彼らの子世代に対してどのような養育観念を持ち、自分たちの老後に対して子世代にどのように期待しているかを探ることである（図表1のBとb）。さらに、図表1の「一人っ子世代の親と一人っ子世代」の世代間関係（A、a）、と「一人っ子世代と一人っ子世代の子世代」の世代間関係（B、b）を比較しながら、これからの中国の世代間関係の行方がどのようなものとなるかについて議論を試みる。第三に、中国では、祖父母が孫を扶養すること、すなわち「隔代扶養」が一般的である（王2004；落合2013：181）。「一人っ子世代の親」が「一人っ子世代の子」すなわち孫の養育負担を担うことが依然として重要な役割になっていることは明らかになっている（図表1のC）。では、「一人っ子世代」はその孫に対しても、同様の意識、認識を持っているかを解明する（図表1のC₁）。CとC₁を比較することで中国における「隔代扶養」の行方を探ることとする。対象年齢層を一人っ子世代に絞ったこと、また一人っ子世代と親世代のみでなく、子世代との関係も視野に入れたことが本研究の特徴である。またインタビュー調査という方法をとることによって、対象者の「生の声」から、アンケート調査では把握しにくい複雑な世代間関係の実態、葛藤、期待などを探ることができると考えられる。

図表1. 世代間関係の概念図

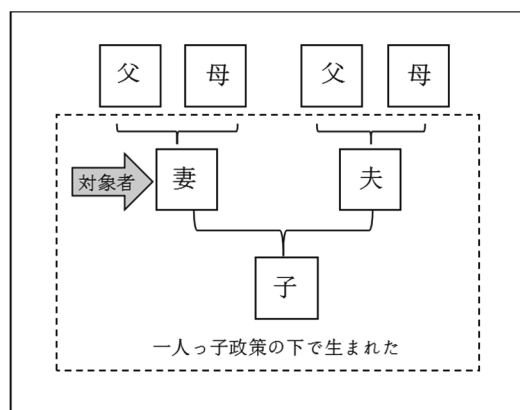


インタビュー調査は2018年8月3日～8月29日に実施した。調査対象者⁴は北京に在住

⁴ 対象者は北京のある国有企業で働く女性たちとその関係者である。

し、一人っ子政策下で生まれたキョウダイのいない一人っ子、年齢層は 20 代、30 代、子どもを持っている既婚者の女性、すなわち、「4・2・1」家族の「2」の妻（図表 2）である。

図表 2. 「4・2・1」家族の概念図



被調査者とその夫の基本属性を図表 3 にまとめた。10 カップルのうち 4 カップルの出身は北京、4 カップルの出身は地方（北京以外の省）である。それ以外の 2 カップルは、夫婦 2 人のどちらかが北京の出身である。10 カップルのうち 8 カップルは共働きをしている。他の 2 カップルは、夫が仕事、妻が専業主婦である。10 カップルのうち 8 カップルが子ども 1 人、2 カップルは子ども 2 人を育てている。

以下では四つの視点から調査結果を示す。(1)「一人っ子世代の親」から「一人っ子世代」へのサポート（図表 1 の A）、(2)「一人っ子世代」から「一人っ子世代の親」へのサポート（図表 1 の a）、(3)一人っ子世代の親の老後に関する両世代の意識（図表 1 の A、a）、(4)一人っ子世代が自分の老後に関した子に対する期待（図表 1 の B、b）である。(1)(2)については、それぞれ、①経済上のサポートと、②日常生活上のサポートに分けて分析する。(3)については、①一人っ子世代の親の意識と、②親の老後に関する一人っ子世代の意識に分けて説明する。

(1)「一人っ子世代の親」から「一人っ子世代」へのサポート（図表 1 の A）

①経済上のサポート

まず、結婚当時の経済的サポートから分析する。親からの経済的サポートで一番高かったのは結婚のための住宅購入費用であることが明らかになった。現在の中国では、住宅の所有は結婚に必要な条件となっている。近年、住宅価格がますます上昇し、北京市内の平均住宅価格は一平方メートル 4 万円を超えた（日本円で換算すると 65 万円に相当）。インタビュー調査で、結婚当時、経済的サポートとして一人っ子世代が親から受けた住宅に関する支援には三つのケースがあることが明らかになった。①新築家屋を買うため、親から大金を受けた、②親から家を譲り受けた、そして③親から大金も家も譲り受けてないが、親と同居生活をしているケースである。

図表3. 調査対象者とその夫の基本的属性

対象	出身	学歴	年齢	親の年齢 (父、母)		仕事状況	結婚年数	子どもの 性別と年齢
A	妻北京	大学	35	64	60	有	14	女11
	夫地方	大学	38	61	64	有		男9
B	妻北京	大学	29	55	54	有	4	女7月
	夫北京	大学	30	58	53	有		
C	妻地方	大学	31	56	53	無	4	女2
	夫地方	大学	33	65	64	有		
D	妻地方	大学院	30	58	55	有	4	男3
	夫北京	大学	30	58	56	有		男2
E	妻北京	大学	38	63	63	有	15	男6
	夫北京	大学	38	68	67	有		
F	妻地方	大学	31	58	55	有	5	男3
	夫地方	大学	32	60	56	有		
G	妻北京	専門校	31	56	63	有	7	女6
	夫北京	大学	35	54	62	有		
H	妻北京	大学	30	63	60	無	2	女6月
	夫北京	大学	30	63	60	有		
I	妻地方	大学院	29	53	53	有	4	女1
	夫地方	大学院	30	55	60	有		
J	妻地方	大学	34	-	60	有	7	男6
	夫地方	大学	34	-	60	有		

Dさんは「現在住んでいる家の購入費の四分の一は住宅ローン、四分の一は夫の親から出してもらったお金、残りの半分は自分の親が支払った。」また、I、J、Fさんの家も同じような状況である。Cさんは夫婦とも地方出身で、自分方の親と夫方の親とも大金を出しても北京で住宅を購入することができず、北京で家を借りて生活している。しかし、夫の親が地元で一軒の家を用意した上、結婚資金として両方の両親が8万円ずつ（日本円で換算すると130万円に相当）を援助した。

夫婦二人とも北京出身の被調査者は、結婚用の住宅を直接両親から資金援助を受け新築を買うのではなく、子が両親から譲り受けるのが一般的な状況である。また、親の経済力

によって状況は異なっている。親が二軒の家を持っている場合、子に一軒を譲る。一軒しか持っていない親たちは、結婚後の子ども夫婦と一緒に住むか、家の子に譲って近くに借りた家に住むか、これは親たちの選択肢であった。B、E、Gさんが結婚した時、夫の親から住宅を譲り受けた。Bさんは「今の北京の物価は高すぎるので、親が住宅と車の援助をしてくれないと、結婚は無理だ」と述べた。

以上のように、被調査者10人のうち、親と同居しているAさんとHさん以外の8人は結婚の際、両親たちから住宅や、住宅資金の援助を受けたことが明らかになった。

次に結婚後の経済的サポートとして、被調査者10人のうち、子育てに協力してもらうため、調査の時点で6人が親と同居生活をしている。3人は親と同居していないが、自分の家から歩いて10分程度の距離である。子育てに協力してもらうために、一人っ子世代と彼らの親との付き合いは頻繁で、結婚後の経済援助があるともないとも、はっきり区別することはできないという結果である。

親と同居生活をしている被調査者にも、二つのケースがある。結婚後自分の新築を持っていないので、親の家で同居生活をするケース、核家族として、結婚後自分なりの住宅を持っているが、被調査者の親たちは孫の世話を協力するため、被調査者の家に来て同居生活をしているケースである。

Aさんは夫と結婚してからずっと自分の親の家において同居生活をしているが、親から受けた経済援助を以下のように述べた。「毎月家賃や生活費など無条件に提供されて、お金を出せと一回も言われたことがない。私と夫の給料はすべて私たちと子どものために自由に使う。たまに子どもたちに何か必要なとき、両親たちは文句なしに孫のために買ってあげる。ちょうど前日小学校に通っている息子の食費を払った。」また、Hさんは今年になって子どもを産んだばかりで、今夫と一緒に自分の親の家で同居生活をしている。「日常生活上の支出はすべて自分の両親が負担している。たまにお小遣いも両親から受ける」と述べた。

他方、Cさんは「家政婦さんの給料、水道料、電気代などの生活上の基本料金はほとんど私たち夫婦が払っている。共働きだから、子どもを夫の親に預けている間、子どもに物を買ってあげたり、家の食料などで使うお金は夫の親が払う。また、子どもの誕生日や新年の祝いするとき、両方の親からお金をもらうことがよくある」という。F、I、JさんはCさんと同じく、親たちが孫の世話を協力するため、彼らの家に来て同居生活をしている。彼らは家の持ち主と世帯主という意識を有しているので、家の基本料金はほとんど自立している。しかし、Iさんは「たまに電気代や水道料の知らせが来たら、親たちがついでに払うときもある」という。Jさんは「もちろん私たちがお小遣いなど家に置いておくけど、親たちはあまり使わない」と述べた。

さらに、親と別居しているが、わずか歩いて10分ほどの近居であるB、E、Gさんの親に対する経済的依存度は親との同居者より低いが、子どもに使ったお金ははっきり区別できない。Bさんは「今自分が親と別居して独立の生活をしているので、生活の基本料金、子育ての費用など、ほとんど自分と夫が負担している。完全な独立状態である。しかし、

子どもを夫の親たちの家に預けている間、子どもの食料などは親がついでに負担していた」と述べた。

以上のインタビュー結果をまとめると、被調査者10人のうち、親の家で同居しているAさん、Hさん以外の8人は、結婚後の経済状況は、相対的に独立している。親からの経済援助は食料と子どもに集中していることが明らかになった。

②日常生活上のサポート

日常生活上、親からのサポートは主に子育てに集中している。同居生活をしている被調査者はもちろん、親の近くに住んでいる被調査者は共働きのため、朝仕事に行くとき、子どもを親の家に預けてから仕事に行く。また、仕事が終わる際に、子どもを迎えに行く。被調査者10人のうち、8人は現在の時点で子育てについて、親から助けを受けている。自分で子育てをしているのはCさんとGさんの二人しかいない。

Cさんは「夫は朝鮮族、私は漢族で、民族の差もある。生活習慣の違いが多いので、親と生活するのが普通より厳しかった。仕方がないので、去年から、私が仕事をやめ、専業主婦の道を選んだ」と述べた。また、Gさんは「こどもが3歳になる前、自分の親と同居していたけど、娘が幼稚園に入ってから独立し始め、今3人で生活をしている。自分の仕事は幼稚園の先生だから、娘を送迎することは問題なく、子育ては自立してできる」と述べた。

他方、親たちに頼って子育てをしている8人の中で、親と同居している人は6人いる⁵。その中の5人は夫婦共働きをしている。平日仕事に行き家事や子育てを親に任せるのが一般的である。Aさんは「毎日学校への送迎はもとより、私が仕事で休暇を取れないとき、保護者会議までも親たちが行く。しかし、親たちの知識に限界があるので、子どもの宿題の指導など教育に関することは私がやる。親たちは、家の家事と子どもの生活上の世話をすることに協力している」という。D、F、I、Jさんも同じく、同居している親に頼んで子育てをしてもらっている。

また、夫の親と歩いて10分程度の近居で、夫の親を頼りに子育てしているのがB、Eさんの2人である。Bさんは「今哺乳期で、朝子どもを食べさせたら、一本の母乳を用意する。職場に行く前に、子どもを夫の親の家に連れて行って用意した母乳を親に渡して、冷蔵庫に保存する。子どものおなかが空いたとき、飲ませる。今親たちと別居しているので、子育てだけ親が協力してくれる」と述べた。Eさんは「今住んでいる家は夫の親と近いけど、基本的にお互い独立していると言える。しかし、毎日仕事に行く前に子どもを親たちの家に預けているので、日常的に、親が子どもの世話をしてくれている」と述べていた。

以上をまとめると、日常生活での親からの援助は、親と同居している人は、家の家事や子どもの世話である。親と別居している人は、主に親から子育ての協力であることが明らかになった。

⁵この節の「親」は、同居している親を指す。また、夫の親か、妻の親かの区別は、5の(2)で考察する。

(2) 「一人っ子世代」から「一人っ子世代の親」へのサポート（図表1のa）

①経済上のサポート

一人っ子から親への援助は主に情愛を示す贈り物などである。しかし、親たちは一人っ子たちが経済的に大変であることを理解しているので、受け取ることが少ない。

Bさんは「普段は親の家に行くとき、何か新鮮な果物とか、野菜などを持って行くことが多い。もちろん、伝統的な祝日にはお菓子などのプレゼントを用意する。わざわざ何かを買ってあげても、親たちにいらないと言われる。医薬品など、親たちには年金と医療保険がある。医療費などについて私たちは今の時点で、まだ払ったことがない」と述べた。

Cさんは「今親たちへの経済的な援助は大部分生活上に使えるもの、例えば、先日ネットショッピングで親に携帯電話のケースを買ってあげた。夫が彼の親に靴を買った」と述べた。Eさんは「親たちが望むのは、私たちがよく顔を見せたり、見舞いにいくこと。経済的に親に対する援助は、週末に親を連れて旅行に行ったり、おいしいものをご馳走したりすることに使ったお金ぐらいだ。普段の生活上、生活用品など何か足りないとき、自分が気づいたときは買う」と述べた。

②日常生活上のサポート

インターネットや携帯電話の普及、情報技術の高度化に伴い、現在の中国も、通信網の整備と利用などが充実している。特に、ネットショッピングが盛んで、健康機器から新鮮な果物まで、ネットで注文して支払うと、自宅まで郵送してくれる。しかし、一人っ子世代の親たちは50代、60代で、技術進歩に追いつけていない人が多い。親に対する生活上の援助はこの部分についてである。

代表的な例としてCさんは「今親に対してできることは、生活用品など、たまにネットで注文して親の家へ送ってあげたり、WeChatの使い方、インターネットを利用したドラマの見方などを教えたりすることしかない」と述べた。Aさんは「先週、家の電気給湯器が壊れてしまって、私が修理人に連絡して修理してもらった。普段の生活上で、親たちができないこと以外は、私に頼まないことが多い」と述べた。

また、Iさんは「今親と同居している。平日仕事で出かけたなら、家事、育児のことは、親に全般的に任せているので、生活上親への援助はあまりないと思う。親たちの負担を軽くするために、自分の部屋の掃除や洗濯物などはできる限り自分がやる。あるといえば、このぐらいのことしかない」と述べた。

以上、日常生活における、被調査者の親への支援は家事の手伝い、親が苦手なインターネットや電気製品の使い方を教えることに限られる。

(3) 一人っ子世代の親の老後に関して両世代の意識（図表1のA、a）

本研究における被調査者の親たちは健康状況が良好なため、ここでいう「親の老後」とは、将来、親が高齢になって介護が必要な時期のことを指す。さらに、分析の際に、「親の老後」に対して①一人っ子の親の意識と②一人っ子の意識を別々に分析する。

①一人っ子世代の親の意識

まず、一人っ子の親の意識から分析する。ここでは、実際に一人っ子の親世代にインタビュー調査をしたわけではなく、一人っ子からみた親の意識であることに注意しなければならない。

被調査者10人のうち7人が自分の親から明確に以下のように言われたことがあるという。「元気なうちに、自分の力で、できる限りのことをやって、子に負担をかけたくない」と。代表的な例として、Aさんは「うちの両親からこのように言われた」として「私とお父さん二人のうちせめて一人が動けるなら、お互い協力して老後生活をする。あなたたちに迷惑をかけない。自分たちの介護のために、あなた方夫婦二人のうちどちらかに仕事を辞めて、私たちの側にいてという要求はしない。万が一、二人とも動けなくなったら、私たちの年金で介護施設に入院するのがいい。週一回、忙しいときは、一か月一回、孫を連れて、施設へ見舞いにきてくれれば十分。あなたたちも自分の子供がいる。子育てと仕事も大変だし、時間を私たちに世話するのは求めない」と述べた。「親たちの考えはごく簡単だ。私に負担をかけないというのが唯一の基準だ」と述べた。

以上から、被調査者10人のうち、生活上で親から子どもと離れたくないと要求されたケースは見られなかった。被調査者の口から、自分の親たちが望むことはただ精神的な癒しや安心感である。例えばよく連絡を取ることや、子どもとしての幸せな生活や自立した姿を親に示すことによって親世代は満足している。

では、将来一人っ子の親世代が高齢になって介護が必要なとき、施設に関して親の意識はどうなっているだろうか。

自分の老後について、施設に関する親たちの意識は五分五分に分かれている。元気なうちは、子に迷惑をかけたくないということが本心だが、年を取って、介護が必要な状況になった場合、「施設に行く」と「やはり子と一緒にいたい」という二つの結果に分かれた。

施設に行く理由として、Aさんの親は「精いっぱいあなたたちを育てて、協力してきたのは、あなたたちが良い生活ができるためなの。あなたの家族が順調であれば、私にとって自分の価値の実現だ。施設に行くのがお互いにとって一番楽だ」とAさんに言った。また、自分と親が違う都市で生活しているFさんは両親から老後について以下のように言われた。「将来、大病でなかったら、年金と保険があるので、自宅の病院で治療することに問題はない。北京には来たくない、住宅も問題だ。年を取ったら介護者が必要なとき、施設に行く」。

一方で、親たちが施設に行きたくない理由として、一つは親の施設に対する否定的な考え方が挙げられる。Cさんが述べたように、「私の親の考え方はまだ古く、施設は子どもがいない高齢者しか行かない。もし行ったら、周りの人に自分が子どもに放棄されたと思われるのが嫌だと親が考えている。」Bさんは「実は私の親たちは施設のことを認めるけど、やはり年を取ったら一家団欒できる方がいいと話したことがある」と述べた。もう一つの理由は、親夫婦の助け合いのことである。10人の被調査者のうち、9人が夫の親と自分の

親の4人とも健在である。親夫婦がお互いに世話することができる限り、施設に行くことを選ばない。Eさんは「親たちが9割以上の時間、夫婦二人でいるので、お互い協力してそれなりにできる。親たちにとって、子どもより、自分たち夫婦の関係性の方が重要かもしれない」と述べた。

以上、一人っ子世代から見た彼らの親の老後に関する意識をまとめると、ほとんどの親が子に迷惑をかけたくないと表示し、元気なうちに、自宅で独立生活をしたいと強く意識していた。将来、自分が高齢になって、施設に頼ることを決めている親は5割である。また、夫婦協力してお互いに世話をしあう。すなわち、子世代に頼ることを期待する人は僅かである。親が自分の老後介護について、子に対する期待は低く、心の絆を保つことしか望んでいないことが明らかになった。

②親の老後に関する一人っ子世代の意識

親の老後介護の意識についてまとめると、北京出身のA、E、Gさんが親と別居してお互い独立しながら介護すると述べた。それに対して、北京出身ではないC、F、I、Jさんは親が自立できるなら、いまのまま地元で別居生活をする。親の介護が必要になったら、近くに家を借りて世話をする。被調査者の7人が自分の核家族を優先し、両世代の独立した生活を保った上で、親を介護するとしている。一人っ子世代は親世代の意識に影響を受け、親に子どもとしての幸せな生活や自立した姿を示すことが親孝行であると思われる。例えば、Aさんは「親たちが力を尽くして私を育ててくれたことについて、親の苦労をちゃんと理解する。もちろん、親が年取ったら、彼たちの老後生活を世話する。しかし、親は私に頼みたくないに決まっている。親の気持ちに従ったら、やはり私の家族が順調だったら、親も幸福に感じると思う。さらに、私も自分の子どもがいるし、もし親に私が世話をしなければならぬという要求をされたら、そのとき手がかせないかもしれない」と述べた。Iさんは「夫婦とも一人っ子だから、負担が重くて、国の養老政策に期待する」と述べた。

その他の3人は親たちと親密な関係性を持ちたいと考え、伝統的な親孝行規範を重視していることが明らかになった。Bさんは「もし運悪く夫の親と同時に4人が病気になったら、介護者を雇うしかない。もちろん治療費などの費用は出すべきだけど、親たちはいらなないと思う。しかし、やはり親孝行をしたいので、一緒に住んで親たちを寂しくさせない」と述べた。Dさんは「自分の親が何か望んだら、自分はそれに応える。親たちは経済力があるので、老後生活はそんなに問題がないと思う。しかし、精神的には親たちを癒したい。今まで、教育、結婚、育児など、経済的に大変支援してくれたから」と述べた。

また、被調査者である一人っ子世代の施設に対する意識は彼らの親と同じぐらい賛否両論に別れている。親の老後、施設に行かせる理由として「今の施設には専門的な介護者がいるので、私たちよりもっと品質の良いサービスが提供できる」とAさんは述べた。Fさんは「同じ都市ではないので、施設しか考えられない」と述べた。また、Gさんは「良い施設を選べば、年寄り向きの活発なイベントが多いので、親たちにとって同じ年の人と一

緒に生活したほうが楽しい」と述べた。Dさんは「施設に行くことは親の意識を考えることが重要だ。親たちが行きたいなら、反対はしない。普段仕事が忙しくて一緒に生活しても、毎日会える時間も少ない」と述べた。

将来、親が高齢になって介護が必要になったとき、施設に入れるより近くに住んで介護者を雇うという形を望む一人っ子世代が多い。また、親の老後介護に関して親密な絆を保つことを大切だとしている。親を施設に行かせたくないとする被調査者は以下の理由を挙げた。Bさんは「現在施設に差があるので、良い施設にいくなら、高額なお金がないと、なかなか入れられない。もし一か月の給料と同じ額を施設の費用として払うようであれば現実的には無理だ」と述べた。Cさんは「親たちの意見を尊重する。うちの親たちは施設について子に不孝にされて放棄された人しか行かないと思っているので、仕方がない」と述べた。Iさんが「施設で親を世話する人を信頼できない。親を施設に放置するのは安心できない」と述べた。

(4) 一人っ子世代の自分の老後に関する子どもに対する期待

被調査者10人のうち、1人だけが子と離れたくないと述べた。Jさんは「私の考え方はまだ伝統的だ。親世代と同じく献身的だと思う。精神的にも物質的にも、全力でサポートしてあげたい。将来、生活上、子どもに近くに住んでほしい。そうすれば、親密な関係性を持つことができる。もちろん、子どもに恩返しを望む」と述べた。他の一人っ子世代9人は、将来自分の子どもに対する期待として、経済面や、子育ての協力といった生活上でも、両世代の独立性を強調していることが明確になった。さらに、親密な絆を保てるよう連絡を取りあえることを期待している。代表的な例として、Bさんは「子に必ず私のそばにいてとは要求しない。進学、結婚、就職について、どこに定住しても構わない。それだけでなく、近くにいて、ささやかなことでも、うちに来られるなんか嫌だ。自分の時間がすべて占められちゃう。年取ったら、子に世話されたくはない、施設に行くとした。孫の世話もできるだけ、私に協力させないでほしい」と述べた。

施設に対する意識について、親世代より柔軟な考えを持っていることが明らかになった。要するに、将来介護が必要なとき、一人っ子世代の自分の子世代に対する期待は、親世代から一人っ子世代への期待よりかなり弱くなっていることが予想される。一人っ子世代は自分の老後を経済的にも、また生活上でも、子世代に援助を頼らず、夫婦協力しながら介護しあうか、施設に期待すると考えている。Bさんは「親が年取っても、施設に行かないのは、親たちが施設に偏見があるからだ。私なら行く。私たちが年取るまで何十年もあるので、施設の整備やサービス品質などがアップすると信じる」と述べた。Cさんは「子どもの人生にはもっといいことがあるべきだ。子どもは夢を叶えることに専念させたい。私を世話することで子どもの時間を無駄にしたくないので、施設に行く」と述べた。Aさんは「施設に行くことを決めた理由は子どもに迷惑をかけたくないからだ。自分も一人っ子だから、老親扶養を担う一人っ子の負担がよく理解できるからだ」と述べた。

5. 考察

(1) 仮説1「フィードバックモデル」から「リレーモデル」へ

以上のインタビューの結果から、一人っ子世代と彼らの親世代、また一人っ子世代と彼らの子世代に関して、経済的なサポート、日常生活上のサポート、情緒的なサポートの三つの面の世代間関係性を示したのが図表4である。

図表4. 世代間関係の概念図

	経済的なサポート	日常生活上のサポート	精神的なサポート
一人っ子の親世代	↓↑	↓↑	●
一人っ子世代	↓↑	↓↑	●
一人っ子世代の子世代	↓↑	↓↑	●

経済的に、一人っ子世代と彼らの親世代の関係性と、現在、親になっている一人っ子世代と彼らの子世代の関係性を比較すると、両世代の世代間でも、経済的支援は親から子世代に偏っている。すなわち、経済的には両世代間の比較によると、リレーモデルになる傾向があると言えるだろう。しかし、異なっているのは、親としての一人っ子世代が将来自分の子に対する経済支援は子が成人になる前は、全力で育てようという意識が認められたけれども、子が成人してからは、彼らの自立性を望む。親世代のように、自分の利益を犠牲にして子を援助することはない。すなわち、一人っ子世代は自分の生活スタイルを重視する個人主義の意識が生まれたと言えよう。一方、一人っ子世代が彼らの親世代に対する僅かな経済的サポートを自覚した上、自分の子どもに対する期待はさらに弱まりつつある。

また、子育ての協力や身体的な介護といった日常生活上の支援状況は一人っ子の親世代と同じように下の世代に向くのにに対し、「恩返し」に対する期待はない。ここでもリレーモデルになる傾向が見えた。しかし、異なっているのは一人っ子世代が親のように自分の退職生活を犠牲にして、子の負担を軽くするために家事や孫の世話をする意識とは異なり、まず個人的独立性を重視し、できる限り自分の生活スタイルを確保した上で、子を援助する。さらに、子世代からの、「恩返し」を期待する姿勢も親世代より弱まりつつある。

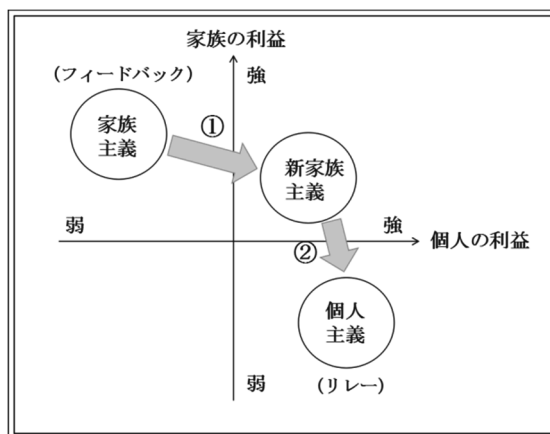
要するに、一人っ子世代と彼らの親世代、一人っ子世代と彼らの子世代、二つの世代間では、経済的サポートと日常生活上のサポートは、王（2004）が指摘する通り下の世代に向いていることが明確になった。しかし、ここで注意しなければならないのは、支援する役割を果たしている一人っ子世代が彼らの子に対するサポートと彼らの親世代から受けた

サポートとでは、その大きさ、内容、質が随分異なっている点である。親世代より、一人っ子世代は自分の生活を中心においており、その個人主義化が浮かび上がってきた。一方で、経済的サポート、日常的サポートが弱まりつつあることとは異なり、心の絆を保つという精神的な繋がりには両世代間とも認められた。

以上の調査結果で、一人っ子世代と彼らの子世代間の世代間関係が変化しつつあるのは、一人っ子世代と彼らの親世代の関係性の変容を踏まえて生じたものだと考えられる。本文で一人っ子世代と彼らの親世代の間関係性を見ると、経済的な支援、日常生活上の支援は親世代から一人っ子世代に偏っている結果は、先行研究(康 2012; 石 2015)と一致した。つまり、現代の一人っ子世代と親の世代間関係はすでに伝統的な家族主義から外れていることが明らかになった。経済の急速な発展と子世代の数が少ないことなどの理由により、親世代が、一人っ子世代の生活の質を向上させ、生き甲斐を実現することを目標としていると同時に、一人っ子が家族よりも個人を優先する意識を持ち始めたからである。この変化を踏まえ、本研究はさらに一歩進めて、一人っ子世代と彼らの子世代の関係性(図表5の②)を加えて、親になった一人っ子が「子が成人したら、やっと自分の時間を手に入れることができ、自由に時間を使いたい」、「私の生活も続けたいので全力で子をサポートすることはしない」という個人の利益を重視している個人主義的な考え方がさらに顕著になっていることが明らかになった。

康(2012)の定義を用いると、図表5で示すように、家庭内で、家族主義を重視する世代間関係は「フィードバックモデル」に相当する。個人主義を重視する世代間関係は「リレーモデル」に相当する。これらの変化を示したのが図表5である。

図表5. 中国の世代間関係の変化



康(2012: 88)『反馈模式的变迁: 转型期城市亲子关系研究』に基づき筆者が加筆作成

一人っ子世代と彼らの親世代の関係性の変容(図表5の①)を踏まえて、本調査結果は、新家族主義(康 2012: 201, 88)からさらに個人主義にむかう②への動きを明らかにした。

一人っ子世代と彼らの子世代の関係性において、一人っ子世代の個人主義化が顕著になっており、世代間では、経済上と日常生活上で独立性を持ち、実際的な支援行為は少ないのに対し、精神的な親密性を保つために連絡を取りあうことが中心になっていく。このように、今後、中国における世代間の関係性はリレーモデルになる（図表5の②）傾向があることを示しており、仮説1が検証されたと言えよう。

(2) 仮説2 父系から双系へ

父系規範に関して同居と扶養の二つの面から考察する。

まず一人っ子世代と彼らの親との同別居状況を示す（図表6）。

図表6. 調査対象者と親（夫、妻）の同別居状況

対象	同別居	状況	世帯主	対象	同別居	状況	世帯主
A	同	妻親	妻親	F	同	夫親と妻親交代	F 夫婦
B	別	夫親の近居	B 夫婦	G	別	夫親の近居	G 夫婦
C	別	別居	C 夫婦	H	同	妻親	妻親
D	同	夫親	D 夫婦	I	同	夫親と妻親交代	I 夫婦
E	別	夫親の近居	E 夫婦	J	同	夫親	J 夫婦

現在親と同居している被調査者は6人いるが、同居には二通りの理由がある。第一に、都市部において、持ち家が購入できないことで、両世代の同居が促進される（城本 2001）ケースで、A、Hさんは経済的に新築を買う余裕がないため、妻親と同居している。第二に、「隔代扶養」（王 2004; 落合 2013）のための一時的同居生活で、D、F、H、Jさんのどちらかの親が孫の世話のために、実家から引っ越して同居している。また、親と別居の3人の中で、B、Gさんは夫親の近所で住んでいる。王（2004）が主張した「分而不離」というケースである。親と離れて完全に独立生活しているのはCさん夫婦のみである。Cさんは子育てのため、仕事を辞め、専業主婦になった。

また、同居状況と言え、夫親の近くに住んでいるB、E、Gさん夫婦と、子育てのため、一時的に夫親と同居しているD、Jさんは、孫の世話をすることが夫親の役割という父系規範が強い。一方で、夫婦両方の親が一人っ子の子育てを協力するために、交代して同居しているFさんとIさんの同居関係や孫の世話に対する夫・妻両方の親の協力体制は、伝統的父系制ではない。しかし、現在の住宅資金の半分以上を夫方の親から受けており、結婚では、主に夫親から住宅を用意すべきだという考えがまだ強い。また、独立して生活しているCさん、妻親と同居しているA、Hさん夫婦にも同居関係や、孫の世話の状況から父系規範に従って生活している根拠が見られなかった。しかし、毎年旧正月、決まって夫親の実家に帰って過ごすことを認めている。

要するに、現段階で、同居関係から見ると、一人っ子世代と彼らの親世代の間に、父系規範はまだ強い影響力を持っているといえよう。

次に、将来一人っ子世代と彼らの子世代に関する同居関係について5. (1) と合わせて考察する。一人っ子世代と彼らの子世代の関係性では、一人っ子世代が彼らの親世代のように次の子世代のために、自らの経済、体力と時間を犠牲にする家族主義的な行動とは異なり、経済上、生活上では、自分なりの生活スタイルを確保した上で、子世代に支援する一方で、子世代に対して、彼らが独立して生活ができる能力を期待する。そのため、子世代の性別にかかわらず、一人っ子世代は彼らの子世代と同居する意欲がなかったことが明確であり、父系意識が弱くなっているといえよう。

また、一人っ子世代が彼らの子世代との同居は望まないが、子世代への結婚用の新築家屋を用意するか否かは父系規範を考察するとき、重要な判断基準である。被調査者10人のうち、2人は子ども2人がいるので、全数として、男児の人数は6人、女児の人数は6人である。男児がいる親5人のうち、4人が「子が結婚するなら、夫方の親として新築を用意すべきだ」という父系規範が認められた。しかし、5. (1) で明らかになった一人っ子世代が経済的に、精力的に自分の利益を犠牲にしてまで全力で子を援助することではなく、子が独立して生活できる能力を持つことを望んでいる。そのため、将来、子世代が結婚するとき、実際には、父親である一人っ子世代が住宅を用意すべきだという父系規範を維持していても実現できないと考えられる。他方、女児がいる親5人のうち、1人の親が、将来子が結婚するなら父親が住宅を用意すべきだとしている。2人の被調査者が女児にも住宅を用意する責任があると考えている。また、2人の被調査者が子の自立性を尊重して結婚用の住宅事情は子に任せるとしている。

以上から、一人っ子世代が希望する彼らの子世代との同居関係において父系規範は見られない。また結婚後の新築家屋を用意することについて、被調査者5人が父系規範を認めたが、行動面では子を援助するつもりはないという。次に、3人が女児にも住宅を用意する責任があると考えている。さらに、2人が住宅事情は自分が考えることではなく子に任せるとしている。このように、今後、一人っ子世代と彼らの子世代の間には、父系的な規範意識が弱くなっていく傾向が見られた。

次に、親世代の扶養に関しては、一人っ子世代が彼らの親世代に対する扶養意識と、将来、彼らの子からの扶養に対する期待という二つの部分に分けて考察する。

まず一人っ子夫婦の親との同居関係と住宅事情の面ではまだ父系規範に従っている。しかし、扶養に関して生活面では、一人っ子世代が親に対する「伝統的な祝日親にプレゼントを送ること」、「週末に親を連れて旅行に行くこと」等のサポートは夫婦両方の親とも同じに行っており、どちらの親に偏るか区別できなかつた。また、「将来、親たちが病気になったら、夫婦二人の誰が世話に行くか」という質問で「どちらの親が病気になっても、夫と分担して一緒に世話をする」という答えが圧倒的に多かつた。万が一両方の親が同時に病気になったら、「別々に自分の親を世話する」との答えから、扶養の面では、一人っ子世

代に彼らの親世代に対する父系的な規範は見えなかった。

次に将来の彼らの子からの扶養に対する期待から見ると、子どもの性別は男性であれ、女性であれ、経済的にも、日常生活上でも、お互いに独立性を確保した上で、精神的な親密性を保つために連絡を取りあうという関係性を望んでいる。そこには、特に父系規範が見られなかった。

以上をまとめると、扶養に関しては、一人っ子世代から親世代への支援において父系規範の影響が弱くなっている。また、一人っ子世代が彼らの子世代に対しての期待から見ると、父系規範はほとんど見られなくなっていることが判明した。仮説2も検証できたといえよう。

おわりに

本研究では、中国社会における世代間関係がどのように変容しているかを「4・2・1」家族の「2」（親になった一人っ子）世代に対するインタビュー調査から明らかにした。その結果、伝統的な父系規範に基づく「家族主義」が崩れつつあり、「リレーモデル」へと移行しつつあること、また父系規範が弱まっていることがわかった。しかし、本研究の中心となるインタビュー調査の対象者が都市住民であること、学歴はほぼ大学及び大学以上であること、また、両親には退職年金があり、健康状態が良いという点を踏まえておく必要がある。実際に親夫婦以外のサポートや介護が必要になった時に今回とは違った回答結果が出る可能性もあり、その意味では、本調査の結果は理想とされる状況を示しているともいえよう。また、中国では、収入や社会保障などの地域差や、学歴差も大きいため、本研究結果を中国の全体的な世代間関係として一般化することは難しい。そのため、本研究の結果をすぐに中国社会全体に広げて当てはめることはできない。広く中国社会全体について述べるためには、より広い地域や階層差をふくめた調査を実施しなければならないだろう。

しかし、本研究の対象である都市部の高学歴者は他のグループ（学歴、階層、地域）より、生活スタイルや意識の変化が進んでおり、世代間関係についても伝統的な行動や意識に挑戦する先駆者であるとも見られる。現在、中国の都市化は急速に発展し、高学歴社会を目指している。さらに、中国の人口構造の変化をみると、2015年「一人っ子政策」が廃止され、3年経ったが、現在も出生率は低下している。今後、超少子高齢社会になることは間違いないと予測できる。そのため、本研究で発見した都市部高学歴層の世代間関係のリレーモデル化と双系化の傾向は、今後広く一般化してくるとも言えるのではないかと。

現在、一人っ子政策の廃止にかかわらず、「4・2・1」家族が直面している厳しい状況は中国社会にとって、今後も見過ごすことができないものである。本調査の一人っ子世代が期待とするような、生活の独立性を保ったうえでの親密な世代間の関係性を実現するためには、高齢者にかかわる年金制度、医療制度を含む社会保障制度、子育て世代にかかわる出産や育児に対する社会保障制度を充実させていかななくてはならないという緊急の課題が示唆される。

付記

本稿は麗澤大学大学院言語教育研究科・比較文明文化専攻修士論文「中国の現代家族における世代間関係の実態と変化—一人っ子世代を中心に—」を元にまとめたものである。

参考文献

日本語文献

- 落合恵美子 2004 『21世紀家族—家族の戦後体制の見かた・超えかた』 有斐閣選書
- 落合恵美子 2008 「現代中国家族の社会的ネットワーク」 首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族』 明石書店：64-110頁
- 落合恵美子 2013 「ケアダイヤモンドと福祉レジム—東アジア・東南アジア 6 社会の比較研究」 『親密圏と公共圏の再編成—アジア近代からの問い（変容する親密圏・公共圏）』 京都大学学術出版会：177-195頁
- 梶田幸雄 2012 「第 204 回コラム『チャイナウォール』—中国人の法意識—」 <http://www.chinavi.jp/kkoramu204.html> (2018年12月20日閲覧)
- 関志雄 2012 「高齢化に備えるための年金改革」 『季刊中国資本市場研究』：63-67頁
- 金紅梅 2017 「中国における都市部在宅高齢者の生活支援課題及び施策の方向性—遼寧省瀋陽市を一例として—」 『福祉のまちづくり研究』 19 (2)：13-22頁
- 郭芳 2014 「中国高齢者福祉施設の不足と制約：日本との比較を通して」 『21世紀東アジア社会学』 (6)：138-155頁
- 城本るみ 2001 「中国知識層の高齢者扶養にみる親子関係」 『人文社会論叢・社会科学篇人文社会』 5：1-18頁
- 施利平 2013 「世代間関係」 石邦雄・青柳涼子・田渕六郎等『現代中国家族の多面性』 弘文堂：199-214頁
- 田渕六郎 2013 「家族形態と親族構造」 石邦雄・青柳涼子・田渕六郎等『現代中国家族の多面性』 弘文堂：27-43頁
- 陳燕 2015 「中国都市部における社区を基盤として高齢者支援システムのあり方に関する研究—大連市をフィールドとした高齢者ニーズとサービスの実態調査を通して—」 立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科
- 費孝通 1985 『生育制度—中国の家族と社会』 東京大学出版会
- 大和礼子 2015 「親—成人子関係のゆくえ」 岩間暁子・大和礼子・田間泰子『問いからはじめる家族社会学—多様化する家族の包摂に向けて』 有斐閣ストゥディア：167-195頁
- 劉曉梅 2005 「中国における社会変動と社会保障制度改革」 『特集/中国・アジアにおけるく

- 持続可能な福祉社会への構想 セッション1:福祉政策』千葉大学『公共研究』2(2):
5-19 頁
- 劉佳 2015 「中国における一人っ子家族の親子関係に関する研究」明治大学大学院 政治
経済学研究科
- 梁春玉・高橋謙造・王徳文・石紅梅・丸井英二 2005 「中国における初代目一人っ子の親世
代の高齢者介護に関する意識」『民族衛生 Minzoku Eisei』71(6):235-243 頁
- 梁卓慧 2018 「中国都市部における「社区養老」方式の現状と展望:浙江省紹興市の事例を
中心として」『人間社会環境研究』35:67-90 頁
- 若林敬子編著・筒井紀美訳 2006 『中国人口問題のいま—中国人研究者の視点から』ミネ
ルヴァ書房

中国語文献

- 風笑天 2013 『中国独生子女問題研究』経済科学出版社
- 辜子寅 2016 「我国独生子女及失独家庭規模估计—基于第六次人口普查数据的分析」『常熟
理工学院学报(哲学社会科学)』1:83-88 頁
- 康嵐 2012 『反馈模式的变迁:转型期城市亲子关系研究』上海社会科学院出版社
- 石金群 2015 『独立与依赖:转型期的中国城市家庭代际关系』社会科学文献出版社
- 王树新 2004 『社会变革与代际关系研究』首都经济贸易大学出版社
- 「我国出生人口连年下降专家预计 2018 年新生儿跌破 1500 万」『网易财经』2018 年 12 月
25 日 <http://money.163.com/18/1225/16/E3SR9HTN00258105.html#from=keyscan> (2018
年 12 月 26 日閲覧)